HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | Shinto shrines in the Japanese sphere : centre, periphery, and beyond, 1868-1945 [an abstract of entire text] |
| Author(s) | 清水, 佳理 |
| Description | この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。<br>https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(教育学) |
| Dissertation Number | 甲第13976号 |
| Issue Date | 2020-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/78676 |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Karli_Shimizu_summary.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：Karli Shimizu（清水佳理）

学位論文題名

**Shinto Shrines in the Japanese Sphere: Centre, Periphery, and Beyond, 1868-1945**
**帝国日本における神社―領域の中心・周縁・境界を超えて　1868-1945 年**

この論文は、1868 年の明治維新から 1945 年の第二次世界大戦の終わりまでの日本国家の世俗主義の発展に関して、近代神社を探っていくものである。本州の神社、近辺または遠方の日本国家の影響圏にあると認識されている海外の神社を見て、三つの主要点を挙げている。１点目は、近代神社はどのように公的・歴史的・現代的なところ乃ち世俗的なところとして扱われていたか。２点目は、近代神社は特に「空間」「時間」「倫理」に関する新しい感覚を浸透させていくことにより、いかにして日本的な世俗（secularity）を日本臣民に伝えたか。３点目は、近代神社は植民地化による新しい皇土や臣民をどうやってその日本的な世俗に取り入れるよう機能したか、である。

この論文では、直接神社について論じる前に、第一章ではまず、「宗教」や「世俗」などの用語を近代の解釈で見ていく。これまで「宗教」という用語は「ゴッド」や「超絶的なもの」に関係するものとして定義されていたが、Asad（1993, 2003）や Josephson（2012）や Masuzawa（2005）や Nongbri（2013）などのポストコロニアル研究者は、「宗教」やそれに関連する語の近代的な概念は、近代ヨーロッパのキリスト教社会に遡るある特定の系譜にあると主張している。つまり、「宗教」や「世俗」という近代用語は中立的な分析カテゴリーではなく、「世俗主義」の政治制度から定義された概念カテゴリーである。近代概念としての「宗教」は 19 世紀の半ばに日本に取り入れられたが、欧米的な「宗教」の概念を日本の状況に適応させるために数十年かかった。1890 年の明治憲法の制定により、大日本帝国は宗教的信仰の自由を限定的に保証する無宗教国家として確立されていく。しかし、神社は信仰や教義から分離され、「国家の宗祀」の場として法的にも「無宗教圏」に置かれていた。無宗教圏に置かれたところとして、神社は臣民に新しい「日本的な世俗性」を浸透させるものとなった。世俗性、乃ち日本政府による世俗主義の政治体制の中で広められた共通理解は、「世俗」に関する欧米の近代概念に基づいたものであった。しかし、キリスト教と古代ギリシアの伝統に頼っている欧米の世俗と違い、日本の「世俗」は神道や儒教の伝統を使って日本国家の状況に適応させられていた。このポストコロニアル研究の立場から、この論文は神社と日本の「新世俗」の関係を探り、本国および海外の臣民にその新世俗を伝えることにおいて神社がどのような役割を担ったかを見ていく。

第二章では、当時の日本という枠組みの中の神社について論じる。奈良県の橿原神宮は神武天皇の即位の儀が行われたことから、地理的、時間的に近代日本の発祥地だとされている。近代神社は戦後の一般的な解説と違い、「政府の命令によって世俗的な場所を装った、本来的には宗教的な場所」ではなく、むしろ、19 世紀後半に「宗教」や「世俗」という近代概念が 19 世紀後半に日本に採用され日本の状況に適応されると共に、神社は日本の「新世俗圏」にあるものの様相を呈してきた。つまり、神社は公共的で、歴史的で、現代的な場所、乃ち「世俗的」な場所としての特徴が強くなっていくのである。同時に神社は、宗教や迷信的なことから遠ざかった。特に大教宣布運動で出された「大教」のような正統派の教義や死者に関わることなど、日本の新しい宗教圏に置かれるものを神社が拒否する傾

向があった。さらに橿原神宮は、世俗的な場所として扱われたことだけでなく、日本の新世俗性を促進するものでもあった。日本国家の近代化のプロジェクトは「時間」「空間」「倫理観」に関する近代日本的な新しい感覚の促進を含んでいた。橿原神宮は日本人が自分の国民性を実現する場であり、大日本帝国誕生の地理的および時間的ランドマークとして皇国の地誌にたいする重要な場所になった。

新しい日本世俗を肯定する傾向は橿原神宮や本州の神社に限られていない。第二章では、北海道にある三つの神社について検証する。北海道は、1869 年 7 月の北海道開拓使の設立により、明治政府による最初の新領土となった。北海道総鎮守である札幌神社は、世俗主義の扶植につれて「宗教」や「世俗（無宗教）」の定義の変化と近代神社の関わりを示していた。明治維新直後に設立された札幌神社は、初期の段階では多種多様な習慣や組織との関係を築くが、日本的な世俗主義が発展するにつれ関係を絶った。橿原神宮と同じように、札幌神社も無宗教圏に置かれていた。札幌神社はもう一つの重要な役割を担った。新皇土北海道の唯一の官幣大社として、この新領土を皇国の豊饒な一部へと組み入れていくことを支えた。北海道護国神社も「皇国化」プロジェクトの一端を担った。官幣大社と護国神社の両方は新しい日本の皇土に可欠な要素となった。北海道護国神社の例は、これまで宗教圏に置かれていた死者が神社の領域に取り入れられていく漸進的な過程を示している。第二章の最後は、小さな村、下富良野の鎮守社である富良野神社について述べる。多くの官国弊社の創立は政府によるトップダウン方式のプロジェクトであったが、富良野神社は北海道の平民も世俗的な近代神社概念を受け入れ、政府の近代神社の基準を応えられるように努めたことを示している。また、地元の鎮守社に政府から与えられた社格も地域住民の誇りとなっていた。

第四章では日本統治下の台湾の神社について探っていった。台湾は近代日本が初めて戦争で得た領土で、国際的な帝国社会に日本が正式に登場した象徴であった。台湾を近代的な民地に変えることで、日本は列国に植民地帝国としての才能を示したかった。ここでも神社は台湾島の開拓や文明化の政策を支えるものであった。北海道開拓の成功例に習い、台湾神宮も無宗教的な場所としての立場に立ち、日本の新世俗を新皇民に伝え、台湾を新皇土として大日本帝国に取り入れた。しかし台湾は、台湾島民の人口が多く中国の古典文化の影響も強いことから、北海道より細心の注意が必要であった。第四章ではまた、「神社」の定義が台湾総督府によって慎重に規制されたことを示した。台湾総督府は国家の宗祀に相応しく、厳しい基準で厳粛な敬神を維持ができる神道的な場所を「神社」として認めた。神社の設立や公認は総督府によるものだったため、台湾在留内地人の意志で創立された神祠などはほとんど「神社」として認められなかった。したがって、台湾の神社は主に国家の宗祀の場所として、トップダウン方式で決められた機関であった。同時に総督府が神社の定義を拡大し、台湾の古典中国文化を利用して、台湾的要素も日本の新世俗に溶け込ませた。しかしながら、外地での内地化運動の拡大につれて、海外神社の理念も「開拓の神学」から「同化の神学」へと変化していった。「開拓の神学」は地元の習慣を神道化することを許したが、「同化の神学」は新皇土を本国と同じように扱って、本国の習慣への完全同化を要求していた。

第五章では大日本帝国の領域を越えて、日本国家の影響圏の端にあるハワイへと目を向けた。20 世紀前半ハワイはアメリカの海外領土であり、アメリカ統治下のハワイの人口の大半は日系人の出稼ぎ労働者であったという珍しい政情であった。ハワイ在留日本人は神社を設立していたが、それらは日本国の無宗教神社の概念の影響だけではなく、アメリカ合衆国の世俗概念の影響も受けていた。日本と同様にハワイ在留日本人も神社を儀式を行

う世俗的な場所ととらえることが多かったが、本国にある神社と異なり、ハワイの神社は法によって教派神道の団体とのつながりを保つことが認められていた。ハワイの神社は日本語のコンテクストでは神社と宗教的な教派神道をはっきりと区別することで、英語のコンテクストでは神社と教派神道は同一つの宗教用語に翻訳することで、多様な様相を使い分けていた。つまりハワイの神社は、神社をアメリカの宗教圏へ移行する時は、教派神道との関係を利用することができたのだ。

この日本影響圏にある四つの地域を探ることで、本論文は近代神社が無宗教的な機関として日本の新世俗を臣民に伝え、又は新皇土での日本世俗の確立を支えたことを実証した。各章では神社と世俗主義の関係について様々な側面を挙げていたが、この研究は先行研究でよく見逃されている内地にある神社と海外の神社の重要な類似性を示した。植民地にある神社は完全なる本国との同化を促進した「同化の神学」への漸進的な過程の中で、本国でも海外でも近代神社は臣民を近代的な良皇民へと導くことに役立った。さらに、大日本帝国影響外の海外神社の事例は、日本とアメリカの異なる世俗主義の対立を神社がどのように乗りきって行ったかを示している。本論文では直接は論じなかったが、神社の事例は近代国家が世俗主義の機関を利用して新国土や新国民を概念的に同化した国家の一員へと変えていった過程を見る枠組を提供している。